



.....
 監督＝リチャード・ドナー／出演＝ポール・ウォーカー／フランシス・オコナー／ジェラルド・バトラー／ビリー・コノリー／アンナ・フリエル（ギャガ・ヒューマックス配給／2003年アメリカ映画／116分）

一行がタイムスリップするのは百年戦争の真ただ中にある1357年のフランスのキャッスルガードの村。しかし教授を救出し、現代に連れ戻す任務は至難のワザ。ラ・ロック・キャッスルの攻防戦は、果して歴史上の事実どおりに展開するのか？ また、そこで展開される現代人と中世の娘との恋は成就するのか？ 実にうまいストーリーで見せてくれる中世の戦争物語と、時代を超えた恋物語に拍手。

🎬 導入部は遺跡発掘現場から

映画はフランス南西部のドルドーニュにある修道院の遺跡発掘現場からスタートする。発掘チームのリーダーはジョンストン教授（ビリー・コノリー）。教え子たちの中心メンバーはアンドレ・マレク（ジェラルド・バトラー）と女性考古学者のケイト（フランシス・オコナー）。

この2人は考古学マニアのようなもので、この修道院遺跡から発見される数々の「宝物」にウットリの毎日。しかし、教授の息子クリス（ポール・ウォーカー）は、過去には興味がなく、ただケイトにぞっこん。既に結婚を申し込んでおり、ケイトもその気十分だが、どうもケイトは考古学との結婚を夢みている様子。

発掘チームが発見した宝物の第1は、修道院の地下通路。しかしこの発見の時に、大問題が発生した。第2は、耳を削がれた貴族男性とその側に横たわる美し

い女性が眠る石棺。2人はその当時としては珍しく固く手を取りあっていた。

ラ・ロック・キャッスルの攻防戦

今日、マレクは学生たちに発掘の背景事情を楽しく講義中。時代は14世紀の1357年。1339年から1453年にかけて100年以上続いた、イングランドとフランスとの百年戦争の真ただ中だ。

ラ・ロック・キャッスルを守るのは、オリバー卿（マイケル・シーン）率いるイングランド軍。そこに攻めかかるのは、オルノー卿（ランベール・ウィルソン）率いるフランス軍。歴史的にはこのラ・ロック・キャッスルの攻防戦においてはフランスが勝利したが、そこには悲しい物語があった。それはオルノー卿の妹、レディ・クレア（アンナ・フリエル）の物語。

すなわち、レディ・クレアはイングランド軍に捕らえられたが、フランス軍の攻撃の前に劣勢となったイングランド軍は、攻撃をやめないとレディ・クレアを処刑すると脅かした。しかしフランス軍は、そのためかえって士気があがり、レディ・クレアの犠牲の上にフランス軍の勝利がもたらされたのだった。

百年戦争のお勉強

百年戦争は当初からイングランドの優勢で進み、フランス王がイングランドの捕虜になったり、イングランド王がフランスのシャルル6世の娘、カトリーヌと結婚して、フランスの王位継承権を獲得したりと、イングランドの勝利は間近に迫っていた。

そこに突如登場したのが、御存知、ジャンヌ＝ダルク。「神の声」を聞いたとするジャンヌ＝ダルクに率いられたフランス軍が、イングランド軍を破り、オルレ안의包囲を解いたのは1429年。2年後、ジャンヌ＝ダルクはイングランド軍に捕らえられ、異端裁判によって火刑に処せられるが、その後フランス軍はイングランド軍を追いつめ、1453年カスティヨンの戦いでフランス軍が勝利して、百年戦争が終了するわけだ。ラ・ロック・キャッスルの攻防戦におけるレディ・クレアは、いわば、ミニ「ジャンヌ＝ダルク」のようなもの。だから、この映画においてもレディ・クレアの果たす役割は重要だ。

物語を結ぶのは「Help Me 1357 / 4 / 2」の文字

この修道院遺跡の発掘は、地元の巨大ハイテク企業ITCをスポンサーとするものだったが、ジョンストン教授は、あまりにもすばらしい発見の数々に疑問をもった。そして単身ITCの元へ……。

その数日後、修道院の地下道の中でケイトが発見したのは、何と教授の眼鏡、そして教授自身の筆によって「Help Me 1357 / 4 / 2」と書かれたメモだった。いくら調査しても、このメモは14世紀の紙に書かれたものであることはまちがいがなかった。教授の身に何か異変が起こっていることはまちがいない……。そこで、クリス、ケイト、マレクたちはITCを訪れ、事情聴取したところ、「衝撃の報告」を受けた。その詳細は省略しよう。要するにジョンストン教授は14世紀にタイムスリップしたまま戻ってこれないということだ。そこでクリス、ケイト、マレクたちも、同じ時代、同じ場所にタイムスリップして教授を救出するというのが、この映画の基本ストーリー。その最大許容時間は6時間。トラブルさえなければ、十分救出可能な計算だったが……。

タイムスリップの科学的説明については、私にも全くわからないしあまり興味が無い。私の興味があるのは、中世の時代における戦争の物語、そして「恋の物語」だ。

教授救出劇は至難のワザ

クリス、ケイト、マレクたちは、いきなり1357年のキャッスルガードの村の近くの激流の中にタイムスリップした。やっと陸上に上がった一行をいきなり襲ってきたのは、赤い甲冑を身につけたイングランド兵。それを助けてくれたのは1人の村の娘(?)。彼女の案内により、教授が捕られているはずのキャッスルガードの村へ入ったが、一行はたちまち発見されて捕らえられ大苦戦だ。

しかも、タイムスリップして現代へ戻る(転送する)ための小道具も壊されたり、失ったり。もちろん途中で殺される人も。警備のために同行した1人は携帯禁止の手榴弾をもっていたため、転送されたITCの研究所でこれが爆発。このように次から次へとトラブル続きだ。いやはや、現代人がいきなり甲冑と武器で身

を固め、戦争している時代の真ただ中に入っていく、捕らえられている教授を助け出すというのは、当然ながら至難のワザだ。

マレクとレディ・クレアとの恋の芽生え

一行を村へ案内してくれた村の娘はなぜか気になる存在。村から教授を連れて逃げ出そうとする一行とは別に、マレクはこの村娘を救出した。タライの舟に彼女を乗せ、川の流れに沿って救出する際の2人の会話は、トンチンカンながら実に面白い。「恋の予感」そのものだ。

しかし、6時間後に現代に戻るはずのマレクと1357年に実在していた村娘との間に恋愛や結婚が成立するはずはない。しかし……。フランス軍に救出されてわかったのは、何とこの女性は単なる村娘ではなく、オルノー卿の妹、つまりレディ・クレアだったのだ。明日がフランス軍総攻撃の日であることやレディ・クレアの悲劇の日であることを知っているマレクは、オルノー卿にくれぐれもレディ・クレアを守るよう言い残して、一行と合流しようとした。

ラ・ロック・キャッスルの攻防戦は圧巻

中世における騎士たちの、鎧に身を固め、数々の作法にのっとり戦いや決闘は、日本の武士道に通じる美しさがあり、また心がある。さらに中世における城の攻防戦は、日本の戦国時代と同じように悲惨なものだが、そこで使われる長弓や石投げ機などのアイデアに富んだ武器や大道具の数々は実に面白い。これは秦の始皇帝や三国志を素材とした戦争スペクタクルでも基本的に同じだ。戦争は悲惨なものだが、このように男のロマンをかき立てるさまざまな要素があることはまちがいない。

この映画におけるラ・ロック・キャッスルの攻防戦は、CGではなく、すべてフルスケールで建てられた城のセットによるもの。また大量の兵士が登場する戦闘シーンを演じたのは地元の中世の時代を研究しているたくさんのリサーチグループとのこと。

したがって、すごい迫力でこれらの戦闘シーンを楽しむことができる。やはり戦闘シーンはこうでなくちゃ……。

✿ 伏線との見事な一致

さて一方、恋のドラマの展開は……？

もともと恋人同士のクリスとケイトが協力し合って、クリスの父親のジョンストン教授を救出する姿は、いわば当然のこと。2人ともよく頑張っているし、ケイトが発見した修道院の地下通路は、1357年に現実に存在したものだから、ケイトの発掘に大いに役立ったことになる。

実に面白いのは、マレクとレディ・クレアとの恋物語。レディ・クレアは、マレクの助言、警告にも関わらず、イングランド軍に捕らえられ、石投げ機による攻撃で城内が不利になる中、オリバー卿は、「切り札」として彼女を登場させた。つまり、「攻撃をやめないと彼女を殺すぞ」ということだ。やはり歴史は変えられないのか……？

しかし、ここで猛然と反撃したのがマレク。「レディ・クレアを放さないと城の火薬庫に火をつけるぞ」と脅し、現実には火を放ったのだ。轟然とおこる大爆発。それを見て城内に突入してくるフランス軍。そんな混乱の中、マレクは自ら刀を持って戦ったが、自分の右耳を切り取られてしまった。何とあの石窟に眠る貴族は自分だったのだ……。

そこから猛然と反撃し、クレアを救出するマレク。そして、「僕はいい。ここに残る」というマレクを残して、危機一髪の中、転送ボタンを押したクリスとケイトそしてジョンストン教授は無事現代へ……。

他方マレクとレディ・クレアとの恋は成就し、2人は幸せに暮らしましたとさ……。

だからこそ今、修道院で発見された石窟には、「善良なる領主アンドレ・マレクとその愛する妻レディ・クレアが静かに眠る」と刻されていたというわけだ。

実に美しいストーリーの恋物語。

タイムスリップやタイムマシーンなどという難しい科学モノよりも、私はこういう恋物語のお話が大好き……。実に楽しく堪能することができた。

2004(平成16)年1月19日記